

仕事帰り ところの診察室

大阪の繁華街 夜間クリニック次々

大阪市内の繁華街で夜間診察の精神科クリニックの存在感が、じわり高まっている。日がとっぷり暮れた頃、仕事帰りの会社員らが駆け込む。医師は「ところの悩みについて相談する場として、頼ってもらえる場でありたい」と、日付が変わる頃まで患者と向き合う。



2回目の診察に訪れた女性(18)に耳を傾ける片上徹也院長(左)。1人になるとしんどくなり、寝ても1〜2時間で目が覚めてしまうという。大阪中央区

平日のある夜、大阪・アメリカ村は、多くの若者たちが行き交っていた。レコード店やエステ店などがひしめく雑居ビルに、高いヒールの女性がひっきりなしに出入りする一室がある。細長い待合室の奥に4畳ほどの診察室がある。「アウルクリニック」。アウルとは夜に活動するフクロウを意味する。診察時間は火曜を除く平日の午後7〜11時の夜間のみだ。公務員の男性(27)が診察室のソファに腰掛け、精神科医の片上徹也院長(33)に向かい合った。数年前の1時期、うつ病で仕事を休んだ。復職後も気持ちや体調がコントロールしにくい。仕事を休まず通える精神科を探し、このクリニックに

たどり着いた。「ビルの中だから人目も気にならないう。定期的に来られると気分も和らぐ」。アパレル店員の女性(22)は今春から一人暮らししながら働き始め、5月の店舗異動後に体調を崩した。6月末の仕事帰りにクリニックに駆け込んだ。片上院長に1時間ほど話した。引越しましや職場環境の変化が原因かもしれないと指摘され、少し気持ちが安らいだ。今は薬を飲みながら仕事を続けている。

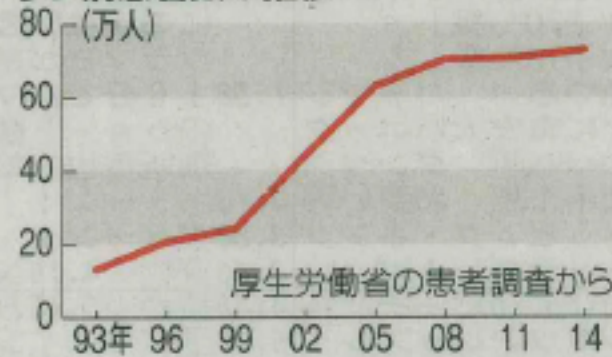
大学休学中の女性(20)は約1年前から通院中だ。大学進学で地方から引っ越したが、人間関係に悩み、一人暮らしの部屋に帰ると涙が止まらず、眠れない日が3日続いたことも。片上院長には「学校、しんどかったら行かんでいい」と言ってもらって楽になった。「来年度からは大学に戻りたい」と思っている。片上院長は診察中、左手はほとんど動かさず、右手だけでマウスを操作する。左足も引きずりながら歩く。5年前にくも膜下出血を発症した。今も左半身にマヒが残っている。医師の両親の元で育ち、精神科医を志したのは高校生頃。当時から「働く人は、昼間の受診はしにくいだろう」と考えていた。だが研修医が終わった2012年3月に倒れた。「もう歩けないかも」と頭をよぎったが、リハビリを重ね約1年半後から働き始めた。クリニックの開設は14年7月。昼は兵庫県内で病院勤務をこなし、夜はクリニックへ。「頼られるのはうれしい。何より人の話を聞くのが好きなので」。開院から3年。カルテはもうすぐ2千枚だ。

増えるうつ病患者

厚生労働省が2014年に実施した調査では、国内で受診中のうつ病患者は72万9千人とされる。08年の調査で70万人を突破して以降も増加を続け、1999年調査時の3倍となった。うつ病で休職した540人に対する調査では、47.1%が5年以内に再発・休職していたとの報告がある。

休職者の半数再発 5年以内

国内の医療機関に受診中のうつ病患者数の推移



大阪府医療機関情報システムによると、午後10時に診察する精神科はアウルクリニックを含む3機関。いずれも大阪市内で、この3年以内にオープンした。大阪・堂島で15年8月に開業した「西梅田」のころから「だのクリニック」の診療時間は、水曜以外の平日午後10時まで。院長の男性(44)は産業医としても働く。「働き方改革といってもなかなか残業が減らない業種もある。時間に縛られて医療に頼ることから遠のく人も多い」と危惧する。

昨年6月、大阪・堺筋本町で開業した「はたらく人・学生のメンタルクリニック」は、日曜を除く午後10時までは、周辺はオフィス街で、立場のある40〜50代も多く訪れる。産業医も務める西井重超院長(35)は「有給休暇を取りたくないという人もいる。プライベートを守りたいとのニーズは多い。働く人が本来のよさを発揮できる社会になればいいですね」と話す。(多鹿ちなみ)